

アメリカ文学と思想史の接点

—Parrington と Commager の場合—

明 石 紀 雄

I

1969年度同志社大学英文学科4年次生を対象とした「英米文学演習 D₇」のテーマは興味深い。“Social Ideas in American Letters”と題されるこの演習は，“social ideas in modern American culture as interpreted by literary artists (novelists)”をさぐるのが目的である。取りあげられている作家・作品としては、John P. Marquand, *Point of No Return*; Robert Penn Warren, *All the King's Men*; John Steinbeck, *In Dubious Battle* および Richard Wright, *Native Son* がある。それぞれの作品について“literary art”の観点からではなく、“content”の点からの分析を試みることがうたわれている。そして講義による説明を通して、作家の政治・社会意識あるいは作品の時代背景が補われることが記されている。担当者は、故 Robert H. Grant 教授であった。

同じく1974年度「演習 IV-A₁」は、“The Modern American Novel”と題されており、“how the novels interpret American society of those years [the 1920's and 1930's]”を追究することが、その目的とされている。そして Ernest Hemingway, *A Farewell to Arms*; F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby*; John O'Hara, *Appointment in Samarra* および前記 Steinbeck 作品が取りあげられている。

「アメリカ文学はアメリカ社会の反映である」とする Grant 教授の文

学的立場からすれば、以上のような演習テーマの設定はうなづけよう¹。文学の *aesthetics* (美的評価) よりも、文学を規定する外的環境もしくは作家の意識や思想の形成に影響を及ぼしたと考えられる社会経済的要因を重視する見方は、一般に文学へのパリントンの (Parringtonian—Vernon Louis Parrington [1871-1929]) アプローチと呼ばれる。Parrington のアメリカ文学観は、彼が生きた時代の雰囲気——革新主義——と密接に結びついていた。革新主義 (Progressivism) は19世紀末から20世紀にかけて起こった社会改革・政治改革を旨とした運動であるが、同時に人間性にたいする楽観的な見方および社会の発展を進歩と反動の抗争の結果と見る歴史観によって特徴づけられる、一つの思想運動でもあった。

Grant 教授が、Parrington の社会哲学に共感していたかどうかは、筆者は知らない。しかし作家の “social ideas” に関心を持っていたこと、作品の評価基準をそこに現われた社会意識の鋭さにおいたことは、きわめてパリントンのであったといえよう。すなわち “social ideas” は当然、時代の社会経済的状况を反映するという前提がここにはあるのである。Grant 教授はのちに「文学としての文学」という立場に近付いていったのではないかと北垣氏は指摘しておられるが、確かに1974年度のコース説明には、作家の “social ideas” をさぐるという表現は見当たらない。これは単にコース運営上のテクニクの問題であるのか、それとも教授の文学観が変わったことの現われと見るべきなのであろうか。アメリカ文学へのパリントンのアプローチの限界を教授が感じていたとするのは、誇張かもしれない。作家の “social ideas” を見るができなくなったのは、Grant 教授の文学的イマジネーションの枯竭であるとするのは、あまりに厳しい見方かもしれない²。しかし “social ideas” なる表現の脱落は教授個人の文学観の問題を越えた大きな意味——象徴的な意味合い——があるように思われる。つまりパリントンのアメリカ文学解釈の方法が、ひいてはアメリカ文学史・思想史研究における革新主義的歴史観が一つの重大な

転期を迎えたことを、それは意味するのである。

II

Parrington の主著は、歿後発刊された未定の最終巻を含む 3 巻からなる *Main Currents in American Thought* (1927-30) である。この書物は 1952年に Mississippi Valley 歴史学会が行なった「すぐれた歴史研究書 (伝記を除く)」に関するアンケートで、1920—35年度分で第 1 位に選ばれた。³

Parrington は、革新主義の影響を受けていた他のいく人かの学者——たとえば Charles A. Beard, Carl Becker, Merle Curti——と同じく、中西部出身であった。デモクラティックな雰囲気が強かった Kansas に生まれ育った Parrington は、Harvard College に三年編入し、1893年にそこを卒業する。卒業後は以前の母校 College of Emporia および University of Oklahoma で教鞭をとり、その後 (1898-1929年) 西海岸の University of Washington で English を教えたのである。

彼の進歩的態度は、アンチ・ハーバード、アンチ東部エスタブリッシュメントの批判精神にうかがえる——

I become more radical with each year, and more impatient with the smug Tory culture which we were fed on as undergraduates. I haven't been in Cambridge since July, 1893. Harvard is only a dim memory to me. . . . I have set the school as a liability rather than an asset to the cause of democracy. It seems to me the apologist and advocate of capitalistic exploitation —as witness the sweet-smelling list of nominees sent out yearly for the Board of Overseers.

そして自分のうちにある “the last lingering Harvard prejudices” をなくすために、アメリカ史とアメリカ文学の社会経済的解釈に向かったとしている。⁴

したがって *Main Currents* において、彼はアメリカの “political, economic, and social development” を重要視するのであり、狭い意味での “belles-lettres” な題材を越えようとする。これはひとつには、ヨーロッパから伝わったりべラルな思想がいかにアメリカの環境のなかで変化したかをさぐるという問題意識があったこと、もうひとつには、文学上の “the genteel tradition” に批判的な Parrington の姿勢に由来するものである。とくに後者の点に関していえば、彼は従来の文学史家が “masculine intellects and material struggles” (Italics mine) の重要性を見落していたかとの問い、次のように述べている――

They have sought daintier fare than polemics, and in consequences mediocre verse has obscured political speculation and poetasters have shouldered aside vigorous creative thinkers.⁵

Parrington の貢献の一つは、植民地時代の「文学」をアメリカ思想史の「主流」にくみ入れたことである。The Mathers, the Cottons, the Winthrops, Roger Williams, Thomas Hooker らは再びドラマティックな人間像をもって、アメリカ思想史の主要舞台に登場するのである。

Main Currents の特徴は、そのきわめて明解な構成にある。すなわち一方の側に進歩を代表する思想と文学があり、これと対立してもう一方の側に反動的諸要素が作用するとする図式に、それはもとづいているのである。このような進歩的な力と反動的な力の抗争がアメリカ思想史を貫く「流れ」なのであり、前者が常に勝利してきたのである。Parrington の時代＝革新主義の時代は、まさに進歩の力が反動の力にうちかっていた時代であった。

Parrington の図式は、いいかえれば、自由と抑制、共和制と貴族制、地方分権主義と中央集権、農本主義と産業主義、理想主義と現実主義といった対立概念を描きだす。さらにフロンティアのデモクラシーとウォール街の金権勢力の抗争をいうとき、彼のイマジェリーはより一層生き生きと

してくる。彼によれば、人間の権利を擁護し伸張することが進歩の意味であり、これと反対に財産権を守ろうとする力は反動である。この基準に照らすならば、Franklin, Jefferson, Emerson らはいわば Parrington のヒーローであり、Edwards, Hamilton, Webster らは進歩を阻む勢力である。社会正義を達成し搾取と抑圧に対抗する人間像を描き出すことは、彼にとって、現実の自分の生き方を学問的に投射することでもあったのである。

III

Parrington の *Main Currents* にたいする批判は文学者からも、また歴史家からも出ている。批判は、Parrington の方法論にたいしても、また革新主義のイデオロギーにたいしてもなされる。

Main Currents が、*An Interpretation of American Literature* という副題をつけられていたことが、批判を厳しいものにした一因であった。歴史家は、Parrington の用いた資料が文学にかたよっていることを指摘し、法律、教育、科学などの分野における思想の影響の吟味が十分でないとする。他方文学者は、「文学」の定義が広いことを疑問視し、また作家をその政治・社会思想をもって評価することの妥当性を問うのである。

Lionel Trilling は Parrington の弱点を次のように指摘しているが、文学・歴史のいずれの側からもなされる批判をうまく要約しているように思う——

Separate Parrington from his informing idea of the economic and social determination of thought and what is left is a simple intelligence, notable for its generosity and enthusiasm but certainly not for its accuracy or originality. . . .

Whenever he was confronted with a work of art that was complex, personal and not literal, that was not, as it were, a public document, Parrington was at a loss. . . . everybody admits, that the weakest part of Parrington's talent was his aesthetic judgment.⁶

Parrington の最大の弱点が、彼の美的判断にあったのは皮肉である。なぜならば彼が“the genteel tradition”を批判したのは、少なくとも植民地時代文学の評価に関して、それがあまりにも美的価値を求めすぎた——“an exaggerated regard for esthetic values”⁷——としていたことを想起すべきであろう。

文学へのパリンントンのアプローチが適切か否かを論じることは、筆者の及ぶところではない。今日状況ではこのような文学解釈はかつてほど流行していないように見えるのであるが、しかし最近のアメリカ思想史（インテレクチュアル・ヒストリー）研究の傾向に照らしてみても、Parrington の再評価を試みてみたい。

第一の点は、Parrington のアメリカン・ピューリタニズムの扱い方に関してである。彼によれば、それは一般的に反動的な存在として描かれている——

An absolutist theology that conceived of human nature as inherently evil, that postulated a divine sovereignty absolute and arbitrary, and projected caste divisions into eternity.⁸

アメリカの200年の歴史は、このようなピューリタニズムの影響から脱するための歴史だったとする彼の説明は、一見説得的である。しかし、同時にきわめて荒っぽいといわなければならない。1920年代の後半から Samuel Eliot Morison, Perry Miller, Ralph Gabriel, Ralph Barton Perry らによって、ピューリタニズムおよびその影響は Parrington が取った角度とは違った視点から、研究されてきた。その結果、それはヴァイタリティーにあふれる生活様式であり、同時に深遠な思想体系であったことが、今日では一応の定説としてある。単純に Jonathan Edwards は“anachronism”（時代錯誤）であったとするのは、Parrington が用いたような大雑把な図式によってしか成り立たない。

第二は、Parrington 自身が、時代のすぐれて社会経済的「産物」であ

った点である。彼の“social ideas”というものが検討されなければならないゆえんである。

Parrington は、他の革新主義者の多くと同様、熱烈なジェファソニアンであった。したがって彼が共感しうる“social ideas”とは、自由・平等の理念、楽観的人生観、進歩の必然性の確信などであった。このような“prejudices”をもってアメリカ思想史・文学史を見ることは、そのままアメリカ思想のリベラルな伝統への信仰を再確認することであった。したがって彼が行なったことは、時代の風潮を代弁したことすなわちアメリカ国民が信じたいと願っていたことを、ドラマティックに提起したにすぎなかったとする Trilling の指摘は鋭い——

Whenever the liberal historian of America finds occasion to take account of the national literature... it is Parrington who is his standard and guide... Parrington formulated in a classic way the suppositions about our culture which are held by the American middle class so far as that class is at all liberal in its social thought and so far as it begins to understand that literature has anything to do with society.⁹

未完の第3巻において Parrington は、Matthew Arnold が「凡庸な中産階級の文化的俗物根性 (philistinism)」と呼んだものまで、言及する予定だったようである。それが実現していればアメリカ文学史の「主流」もいくらか異なったイメージに描かれたかもしれない。彼は果たして、美的判断をさらに犠牲にしてまで「凡庸な中産階級」の文化面での達成を礼賛したであろうか。

革新主義は、実際にはジェファソンの伝統への回帰を目ざした保守的運動であったとする見方もある。あるいはそれは最終的には、産業主義が生んだ深刻な諸問題に対応できなかったとする解釈もある。いずれにしても、革新主義的センチメントは、表面上の楽観主義にもかかわらず、根底には混乱と不安の要素を含んでいたのである。そしてこのようなペシミスティ

ックな要素は、アメリカ国内の状況およびアメリカの国際的地位の変化にともなう、容易に表面化する可能性があった。不況、第二次世界大戦、冷戦と続いた時代には、単純な希望のイデオロギーを継続することはできなかった。そしてそれはそのまま、Parrington の時代の終わりをも意味したのであった。

IV

Main Currents in American Thought はアメリカ文学史・思想史の概説書として、それ自身が持つ弱点ゆえに、また時代の雰囲気が変わったことにも影響され、さらにはニュークリティシズム——それは個々の作品の文学的クォリティー〔メタファー、象徴、語義など〕を追究し、必ずしも時代あるいは同一著者の他の作品との関連性を見ることはしない——など新しい文学研究方法の台頭もあって、今日では以前ほど重要な位置を占めていない。しかしそれだからといって、それをまったく過去のものとして顧みないのはいささか性急にすぎはしないであろうか。

ここで、Parrington のアメリカ文学観をうけつぐ立場にあるものとして、Amherst College の Henry Steele Commager 教授の名をあげたいと思う。教授は1950年に、*The American Mind; An Interpretation of American Thought and Character Since the 1880's* を著わしたが、この書物は、*Main Currents* を完結させたと評価されるものである。いくつか理由がある。まず第一に、文学を社会経済的環境と関連させて見る姿勢において共通していること、第二に、時代的に Parrington が筆をおいたところから Commager 教授は始めていること、第三に、いずれの著作もアメリカ思想史の総合の試みであること——同様の試みは Stow Persons, *American Minds* (1958) 以来現われていない——、そして最後に（しかももっとも雄弁に）Commager 教授は Parrington の弟子をもって認めていることなどである——

My deepest intellectual debt is to Vernon Louis Parrington whose great study of American thought has long been an inspiration and whose disciple I gladly acknowledge myself.¹⁰

ほかのところで教授はまた、*Main Currents* は “the most brilliant study of the American mind that has been written” ともいっている。¹¹

Commager 教授はさらにそのリベラルな思想においても、ジェファソンの伝統をうけついでいるのであり、このような教授自身の “social ideas” は彼の歴史研究に顕著に示されている。たとえば教授の最初の主要な著書が19世紀中期のマサチューセッツの牧師・超絶主義者・社会改革者、Theodore Parker の伝記であったこと（1936年）や、アメリカ啓蒙主義の研究を通じて、『アメリカ独立宣言』および『憲法』の現代的意義を追求しようとしているところに、それは現われる。Commager 教授は、公開講演や新聞・雑誌への寄稿を通して現代アメリカの政治・外交問題に——とくに議会制民主主義、市民的自由のよう護、アメリカの対外コミットメントについて——鋭い論調を加えているが、その活躍は広く知られている。¹²

さて1880年以後のアメリカ文学の展開についての教授の見方は、基本的にパリントンのものであるが、よりソフィスティケートされたものでもある。この時期のアメリカ文学の主要テーマは、「抗議と抵抗」つまり非人間的な道徳的・政治的に腐敗堕落した体制にたいするプロテストであると規定し、このような観点から作家・作品を評価する。時代的に、1) ポピュリズム（1870-90年代）2) 革新主義（1890-1910年代）3) 1920年代 4) 1930年代と分け、これをタテ糸にし、さらに “Determinism in Literature” (London, Norris, Dreiser ら), “The Cult of the Irrational” (Anderson, Frank, Pound, Stevens, Faulkner ら), “The Traditionalists” (Wharton, Cather, Glasgow ら), “The Literature of Revolt” (Dos Passos, Steinbeck ら) という分け方をヨコ糸にして、巾広く現代アメリ

カ文学の傾向をたどる。

18世紀的個人主義および合理主義を信奉する Commager 教授が、あたかも Parrington がピューリタニズムを批判したように、London や Norris の文学を批判するのは理解にむづかしくない。すなわちいかなる形の決定論（独善性、絶対主義）をも認めないのはジェファソンの=革新主義的伝統なのである。同じ立場から、教授はフロイドの心理学の影響を受けた小説や象徴主義の詩を高く評価することはできない。他方、Wharton らが示す過去へのノスタルジアに同情を示すが、共鳴はしない。世紀の変わり目以後、アメリカ社会の都市化=産業化は厳然たる事実であり、問題は現実がいかに対処すべきかということであり、いたずらに慨嘆することではない。また諷刺は文学的手法としては自らの敗北の告白であり、自らの幻滅を強調することはパーソナルな問題の押しつけである——前者の例は Mencken, Fitzgerald; 後者の例は Wilder, Wylie——と、Commager 教授は考える。最後に、Steinbeck の *Grapes of Wrath* は抗議の作品ではあるが、真実それは“affirmative note”つまり信仰、希望、博愛というアメリカ人の伝統的価値をうたっているという点で、文学の理想的なあり方としているのは注目に値しよう。

純粹に文学批評の観点からすれば、教授の作品解釈あるいは文学観全体は、必ずしも手放して認められるものではないであろう。たとえば、Edwin Arlington Robinson をして“the most profound of American poets of the twentieth century”という見方はいく人の文学史家の賛同をえられるであろうか。¹³ James Branch Cabell の価値は、逃避の作品を著わしただけであると断言できるであろうか。Stark Young, Robinson Jeffers, Carl Van Vechten らの詩人・批評家をいずれも数行のスペースでもって論じるだけで十分であろうか。

ごく単純ないい方をすれば、Commager 教授が個人的にはその作品を愛誦する Robert Frost を、現代アメリカ文学の主流に含まなかったかと

ということが、問題なのである。教授の評価基準は、あくまでも“literature as philosophical expression”というところにあった。Frostには philosophy がなかったのである。このような文学的立場——きわめてパリン¹⁴トンののである——は適切であるか、あるいは永続するものなのか。アメリカ文学の社会経済的解釈の問題は、いぜんとして Parrington が最初にそれを提起して以来、継続してあるのである。

注

- 1 北垣宗治氏の引用による。(『LLL』No. 67, 1975. 2. 15)
- 2 1970年9月頃であったと思うが、Grant 教授は筆者に、“I don't see them [social ideas of American writers] any more.”と語ったことがある。
- 3 同じく1936—50年度分では Merle Curti, *The Growth of American Thought* (1943) が選ばれた。この書物は革新主義史学の一つの頂点を示すと評価されている。
- 4 Secretary's Sixth Report Harvard College Class of 1893, Cambridge, 1918, pp. 220-1; quoted by Robert A. Skotheim, *American Intellectual Historians* (Princeton, 1966), pp. 125-6.
- 5 (Harvest Book ed.: New York, 1954), Vol. 1, ix, xii.
- 6 *The Liberal Imagination* (Doubleday Anchor Books ed.: Garden City, 1957), pp. 1-2.
- 7 *Op. cit.*, Vol. I, xii.
- 8 *Ibid.*, x.
- 9 *Op. cit.*, p. 1.
- 10 *The American Mind* (Yale Paperbound ed.: New York, 1959), ix.
- 11 “The Discipline of History,” *The Great Ideas Today 1972* (“Britannica Great Books”: Chicago, 1972), p. 267.
- 12 たとえば “America in the Age of No Confidence,” *Saturday Review/World* (August 10, 1975); “Learning from the Tragedy,” *Time* (August 19, 1974) などがある。
- 13 *Op. cit.*, 160.
- 14 *Ibid.*, viii, 157.